

荒尾市の人口の動向等について

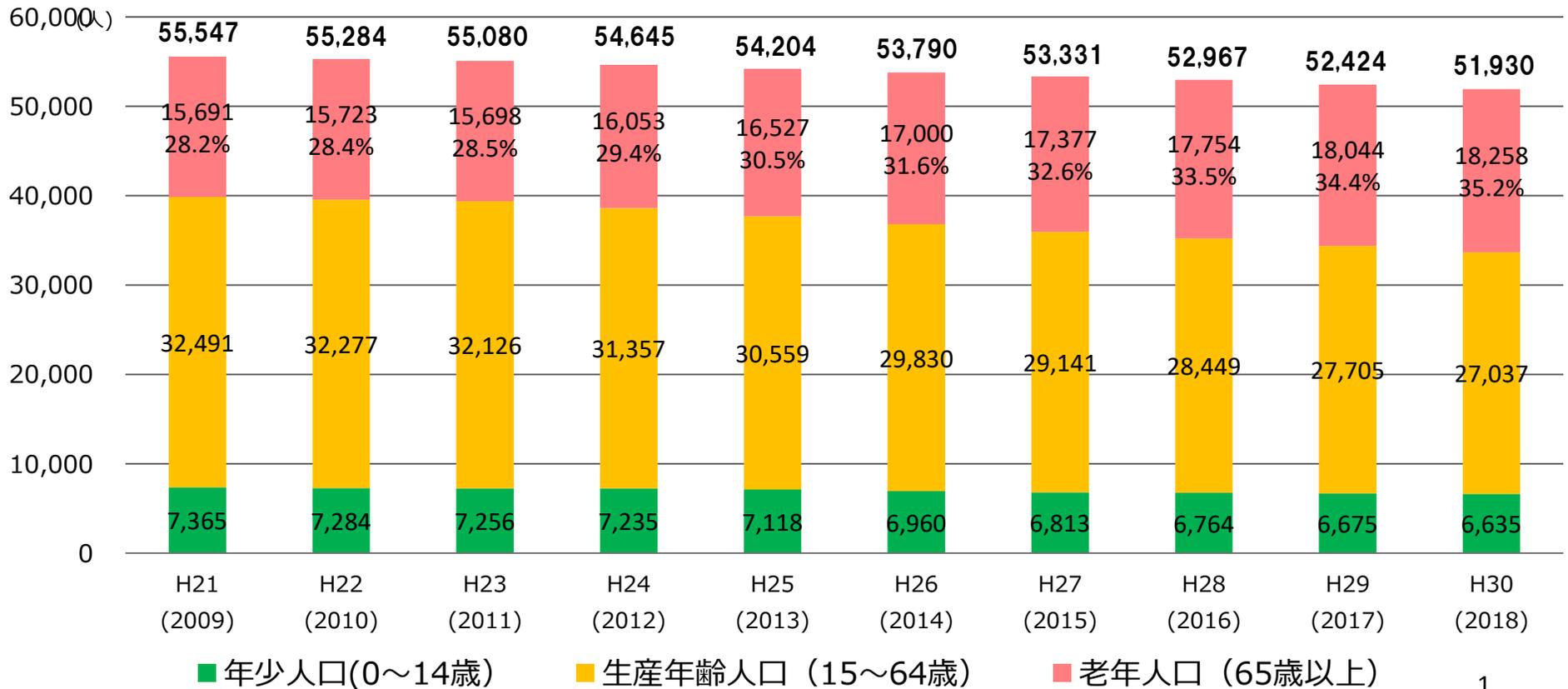
令和元年度 第1回 荒尾市総合計画審議会資料

令和元年6月19日

近年の荒尾市の人口構造の変化（2009年→2018年）

- 荒尾市の人口は、2009年以降減少傾向が継続しており、2018年10月1日現在で51,930人となっている。
- 現行の総合計画終期の目標人口である52,800人を2017年以降下回っている。
- 人口構造は、高齢化率の上昇が継続しており、35.2%となっている。

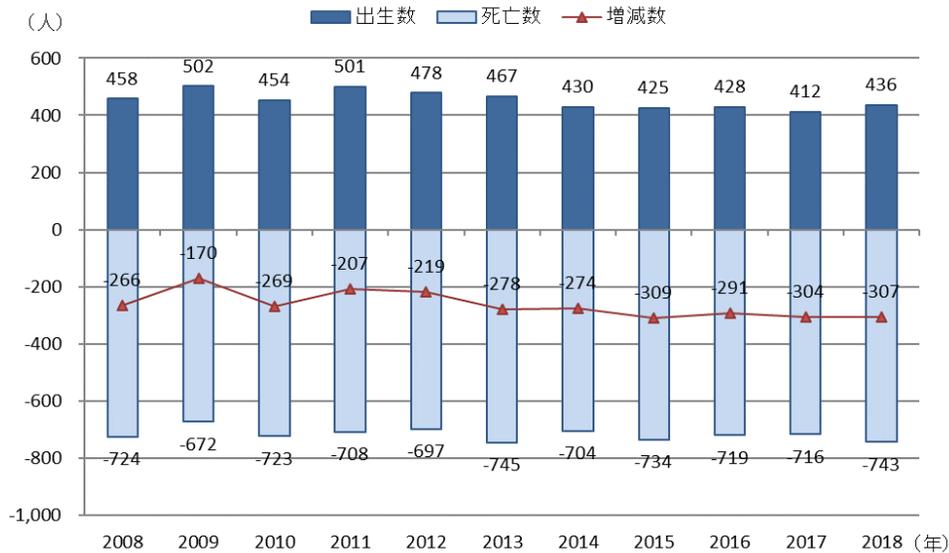
荒尾市の人口推移【熊本県推計人口】



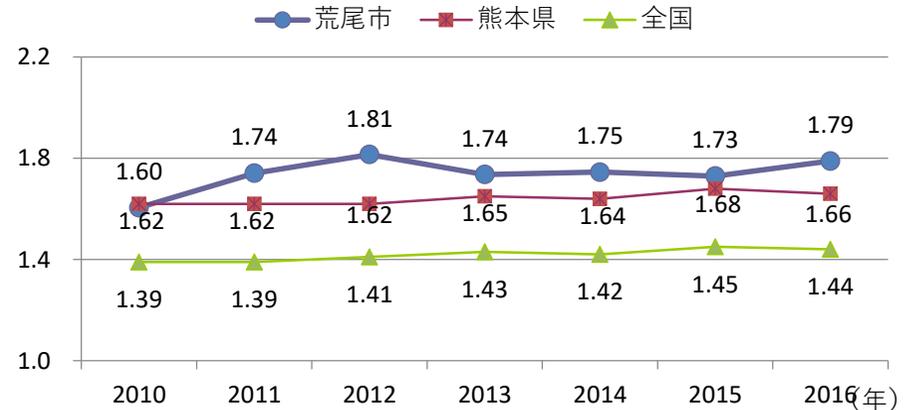
荒尾市の出生数・出生率の推移（2009年→2018年）

- 荒尾市の出生数は、2013年までは400人台後半で推移していたが、2014年以降、400人台前半まで減少している。
- 一方、2014年以降は概ね430人前後で推移しており、減少傾向には一定の歯止めがかかった状況が継続している。
- 合計特殊出生率は、2013年に一旦低下したものの近年は概ね上昇傾向にあり、2016年は1.79と、熊本県(1.66)や全国(1.44)と比較しても高い水準にある。

自然動態の推移【熊本県推計人口】



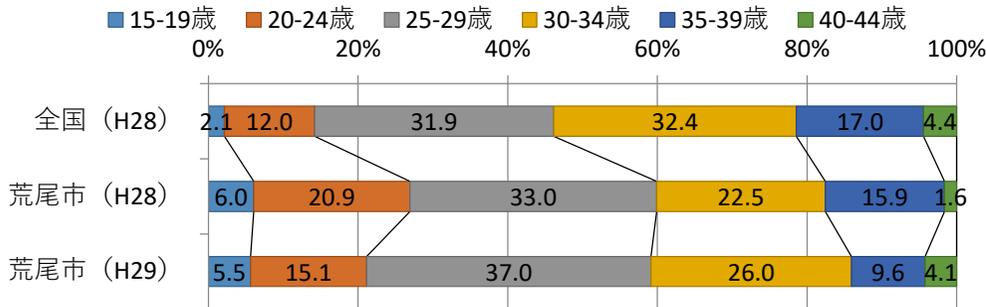
合計特殊出生率【人口動態調査の概要を基に算出】



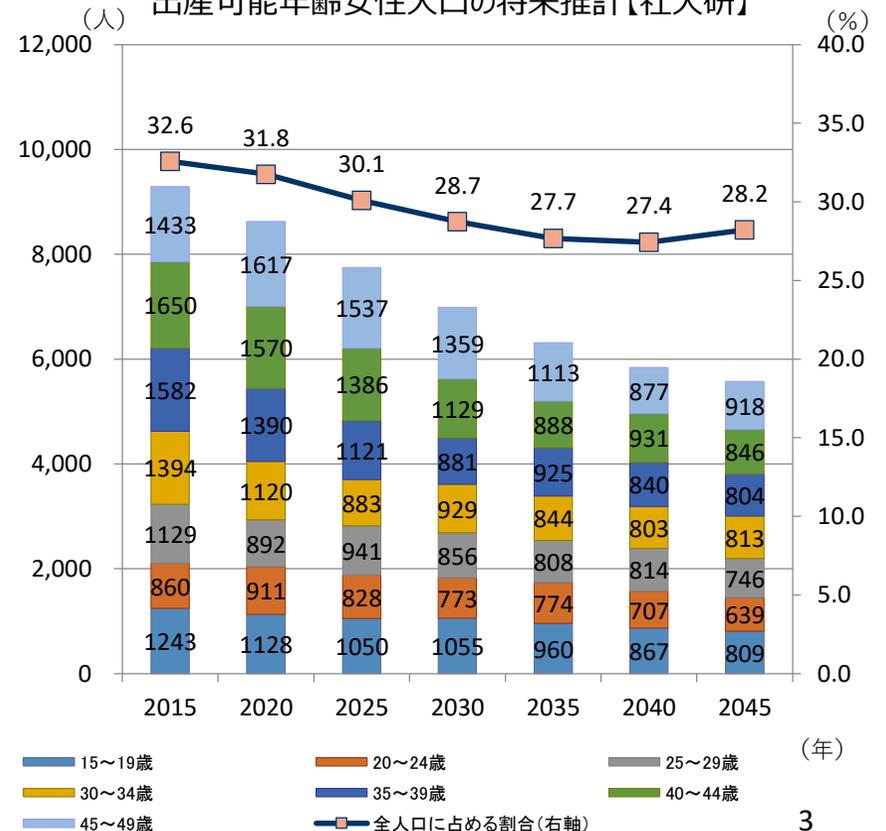
荒尾市の晩産化の状況

- 荒尾市の第1子の出産年齢は全国よりも若い傾向があり、晩産化の傾向はあまりみられない。
- 女性の出産可能年齢(15歳～49歳)人口の将来推計をみると一貫して減少傾向にあることから、出生率が近年の平均で推移すると仮定した場合、2035年には年間の出生数が300人を下回ることが見込まれる。

年齢階級別 第1子の出産割合【母子保健の主なる統計】

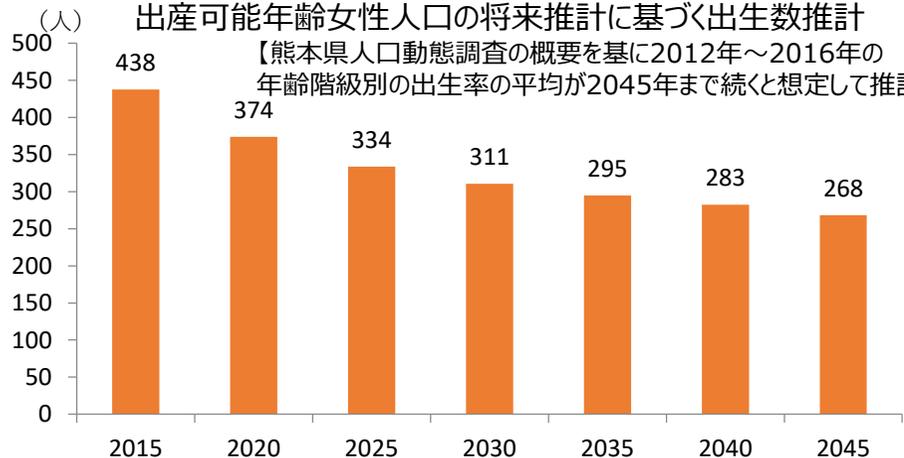


出産可能年齢女性人口の将来推計【社人研】



出産可能年齢女性人口の将来推計に基づく出生数推計

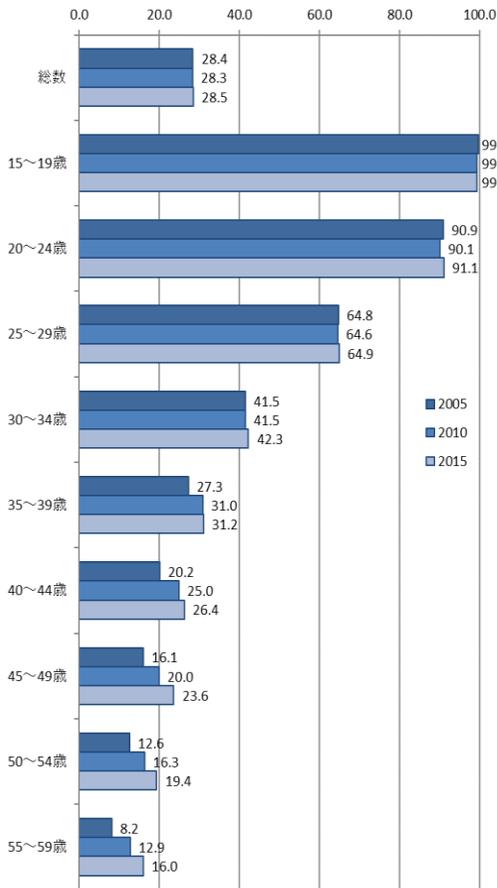
【熊本県人口動態調査の概要を基に2012年～2016年の年齢階級別の出生率の平均が2045年まで続くと想定して推計】



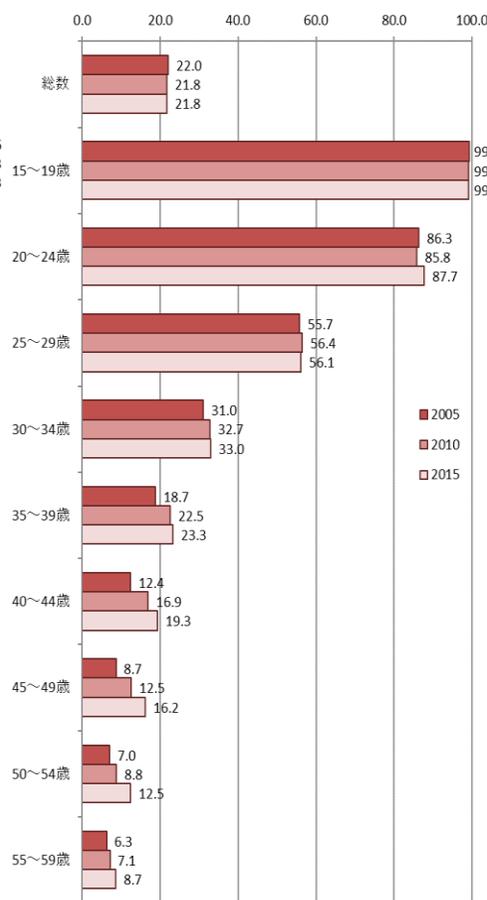
荒尾市の未婚の状況

- 荒尾市の未婚率は、各年代とも女性よりも男性が上回っており、男女ともに40歳以上の未婚率が年々大きく増加している。
- 熊本県全体と比較すると、男性は30歳以降、女性は35歳以降の未婚率が高い。29歳以下の若年層は、特に女性の未婚率が低く、晩婚化の傾向はあまりみられない。

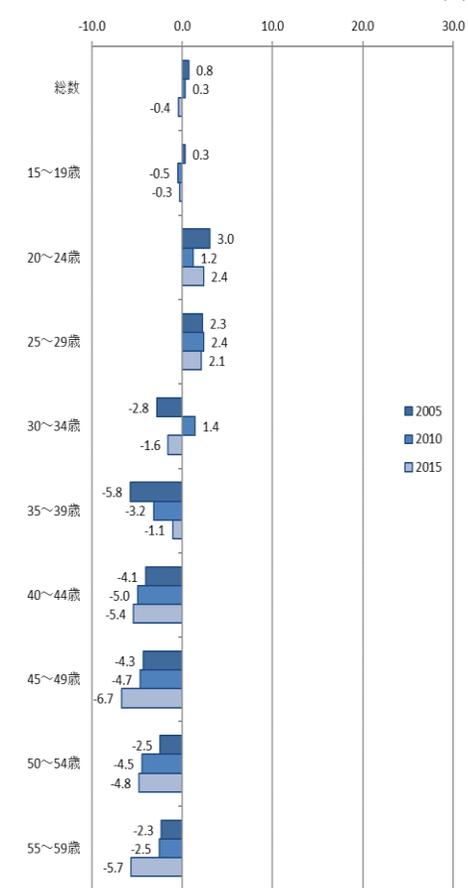
年代別未婚率(男)【国勢調査】 (%)



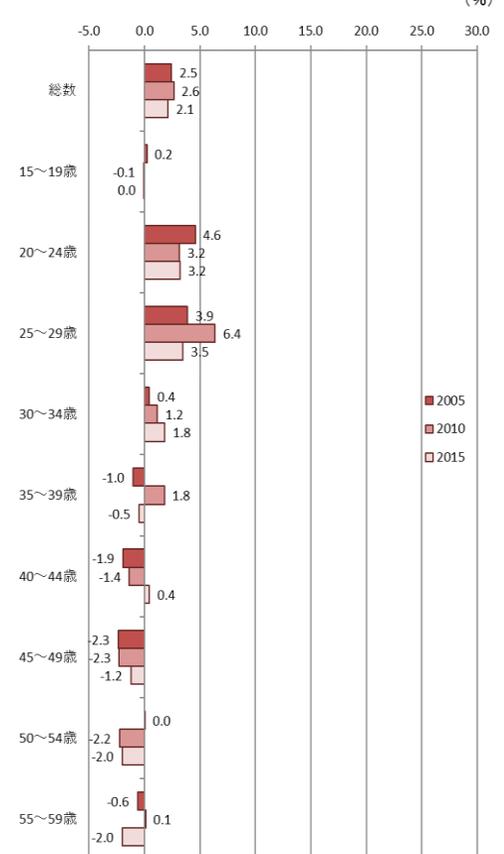
年代別未婚率(女)【国勢調査】 (%)



年代別未婚率の差(男)【県-市】 (%)

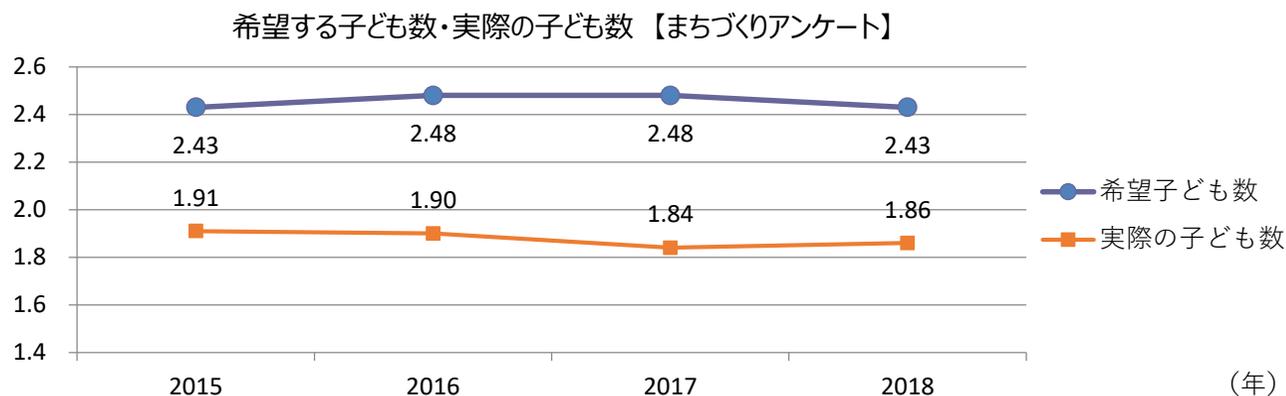


年代別未婚率の差(女)【県-市】 (%)

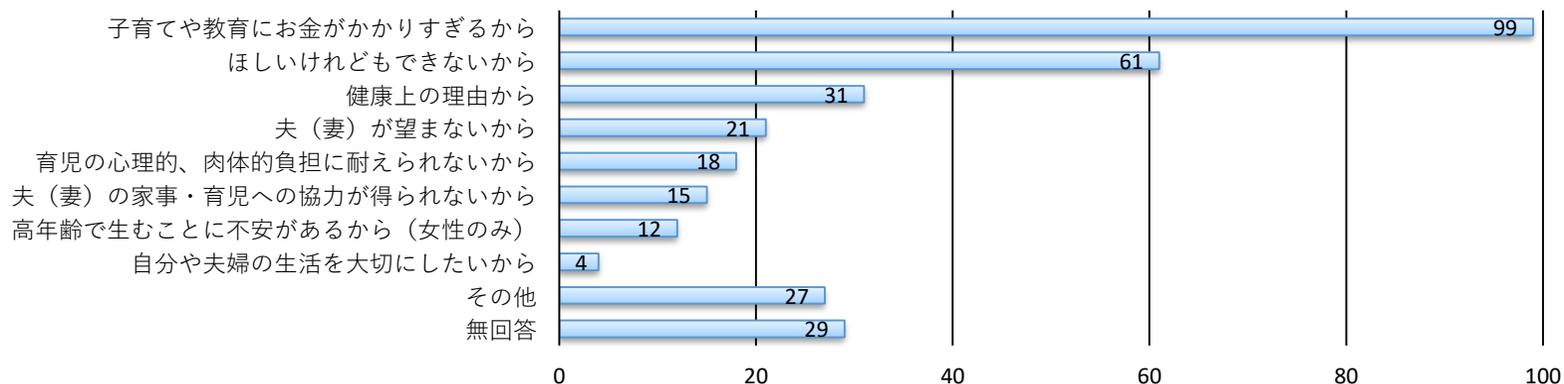


希望子ども数数の推移と希望子ども数を実現できない理由

- 希望する子ども数は2.4人程度で推移している。
- 実際の子ども数は、結婚した夫婦からの出生子ども数と同様1.9人程度となっており、2人を下回っている。
- 希望子ども数を実現できない理由は、経済的負担が大きすぎる、ほしいけれどもできない、という項目が突出している。



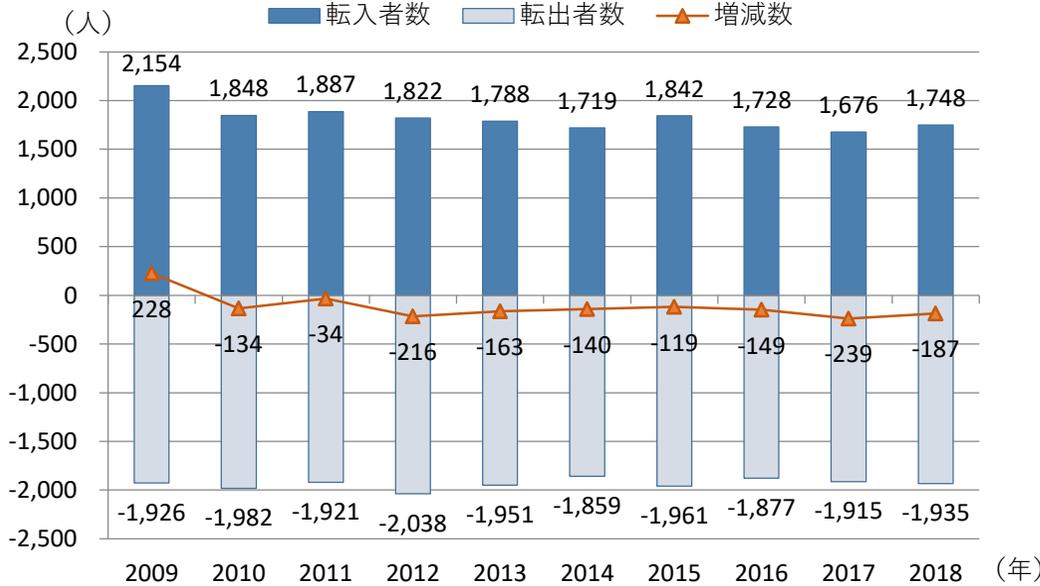
希望する子どもの数より実際の子どもの数の方が少ない理由【H30まちづくりアンケート】



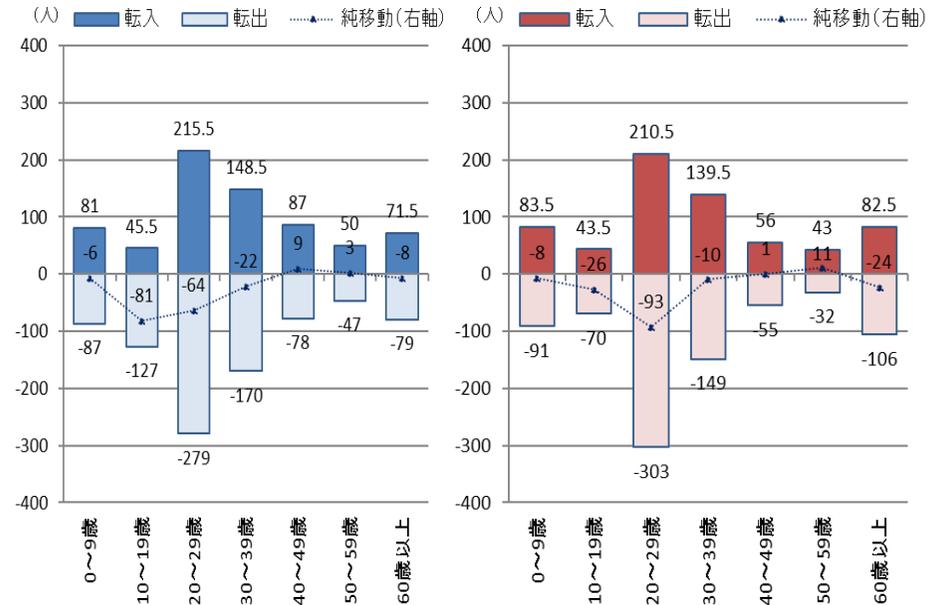
荒尾市の転入・転出者の推移（2009年→2018年）

- 荒尾市の社会増減をみると、2010年以降、転出者が転入者を上回る転出超過が継続しており、2018年においては187人の社会減となっている。
- 年齢階級では、男女とも20～29歳の移動が多く、転出超過幅も大きい。

社会動態の推移【熊本県推計人口】



男(左図)女(右図)別・年齢階級別 転出・転入【人口動態及び世帯数調査】

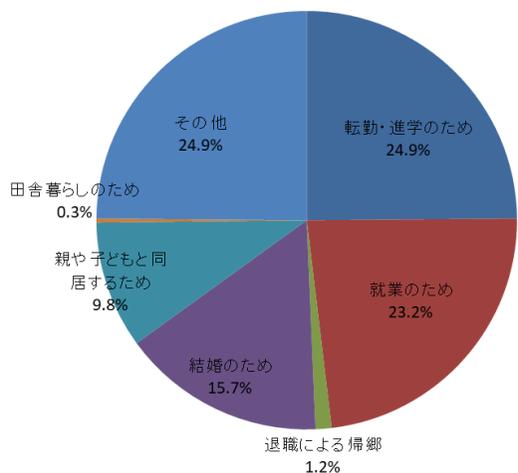


転出の理由

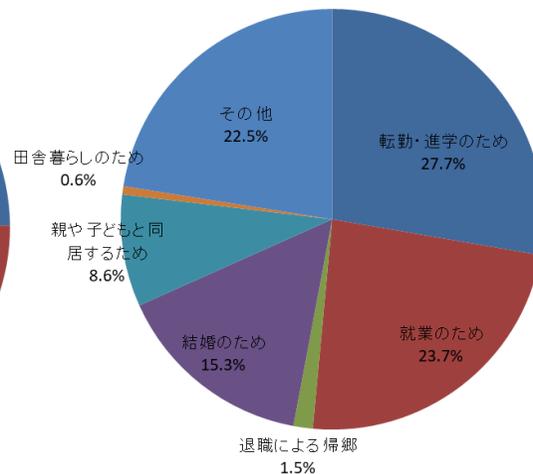
- 平成30年度から転出者に対し実施しているアンケート調査によると、転出理由は、全体で「転勤・進学のため」と「就業のため」が合わせて48.1%と最も多く、次いで「結婚のため」が15.7%となっている（「その他」を除く）。
- 男女別でも、進学・就職や結婚に伴う転出が多い傾向に大きな差はみられない。
- 転出超過幅が最も大きい20歳代の状況をみると、「転勤・進学のため」と「就業のため」が合わせて57.9%、「結婚のため」が21.6%と、進学・就職に伴う転出が多い傾向が特に強くなっており、進学・就職や結婚に伴う転出を合わせると、79.5%を占める結果となっている。

転出理由【H30転出者に対する窓口アンケート】

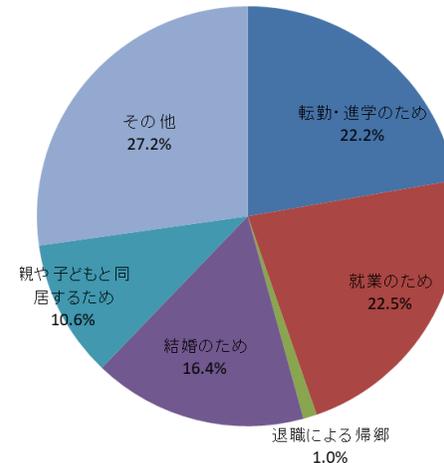
転出理由(全体)



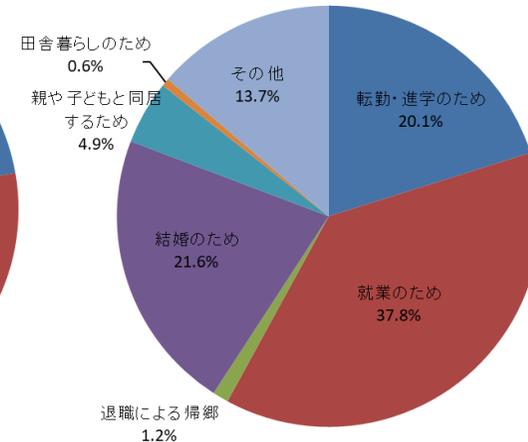
転出理由(男)



転出理由(女)



転出理由(20歳代)

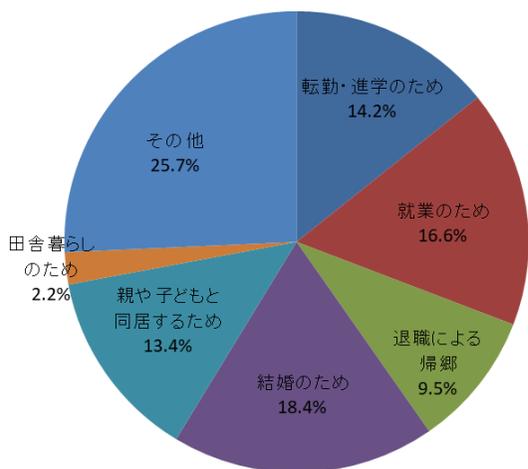


転入の理由

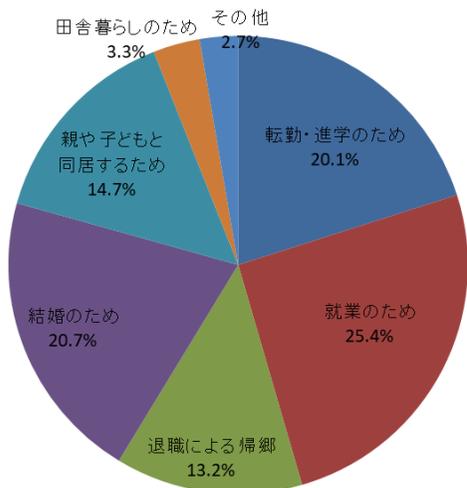
- 転入理由は、全体で「転勤・進学のため」と「就業のため」が合わせて30.8%と最も多く、次いで「結婚のため」が18.4%となっており、転出理由と同様の傾向である（「その他」を除く）。しかし、転出理由と比較すると、進学・就職に伴う移動の割合は少なく、「退職による帰郷」の割合が多くなっている。
- 男女別では、男性は進学・就職に伴う転入が多いが、女性ではその割合は少ないため、本市において女性が希望する就業先が十分でないことが考えられる。
- 転出理由と比較して、男女とも「親や子どもと同居するため」と「退職による帰郷」が多くなっており、本市と何らかの関係がある人の転入が多いことが分かる。
- 移動が多い20歳代の状況をみると、転出理由と比較して、進学・就職に伴う移動の割合は低いものの、結婚に伴う移動の割合は約3割と、高くなっている。

転入理由【H30転入者に対する窓口アンケート】

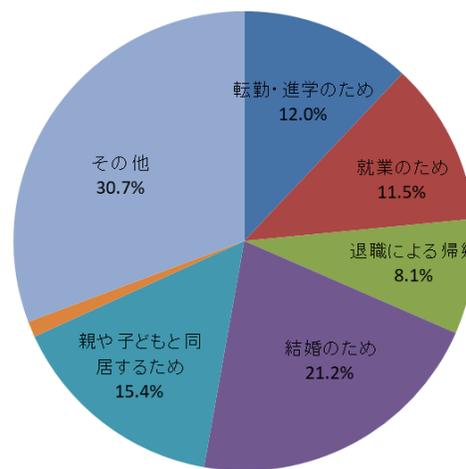
転入理由(全体)



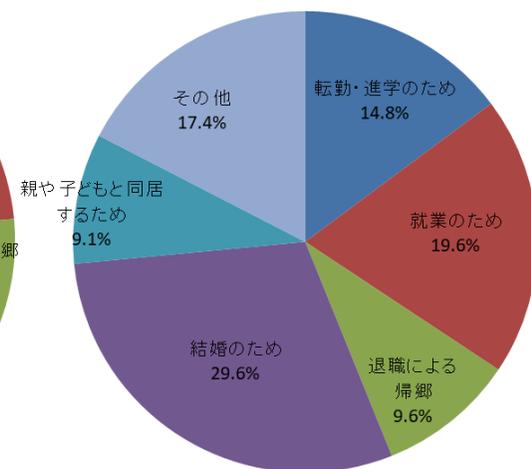
転入理由(男)



転入理由(女)



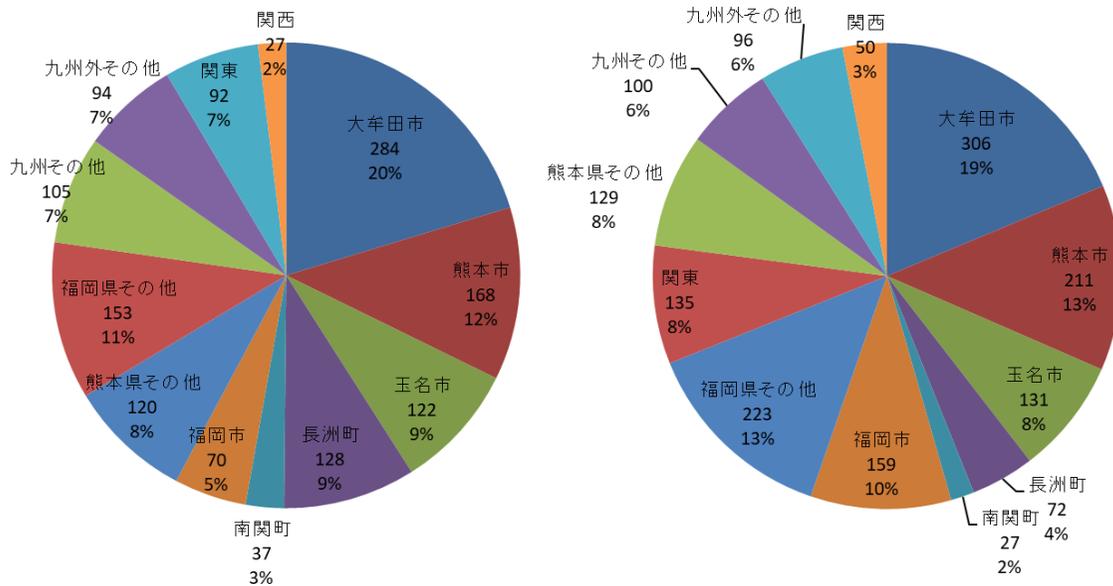
転入理由(20歳代)



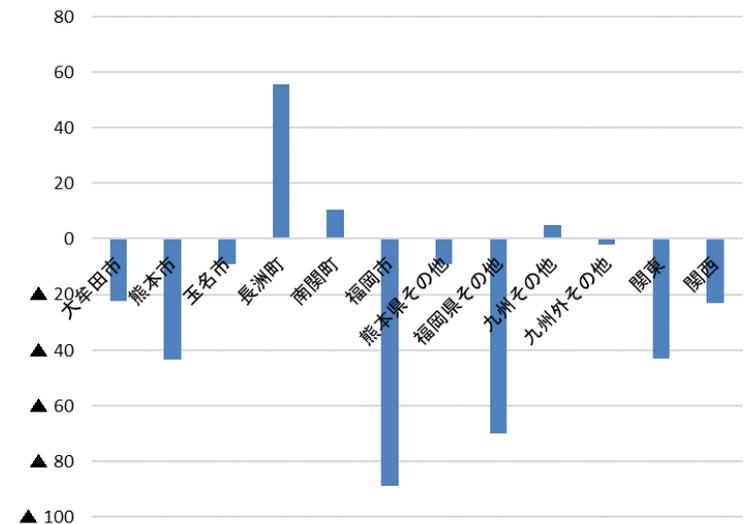
転入・転出の地域別内訳（2016・2017年平均）

- 転入元をみると、大牟田市が284人と最多であり、次いで熊本市が168人、福岡県のその他の市町村が153人となっている。
- 転出先も、大牟田市が306人と最多であり、次いで福岡県のその他の市町村が223人、熊本市が211人となっている。
- 熊本県内では、熊本市、玉名市、長洲町が転入・転出の多い上位3市町となっている。
- 長洲町からは転入超過が大きくなっているが、一方で、福岡市をはじめ福岡県のその他の市町村への転出超過が特に大きくなっている。

転入者数(左)・転出者数(右)の地域別内訳【住民基本台帳に基づく人口】



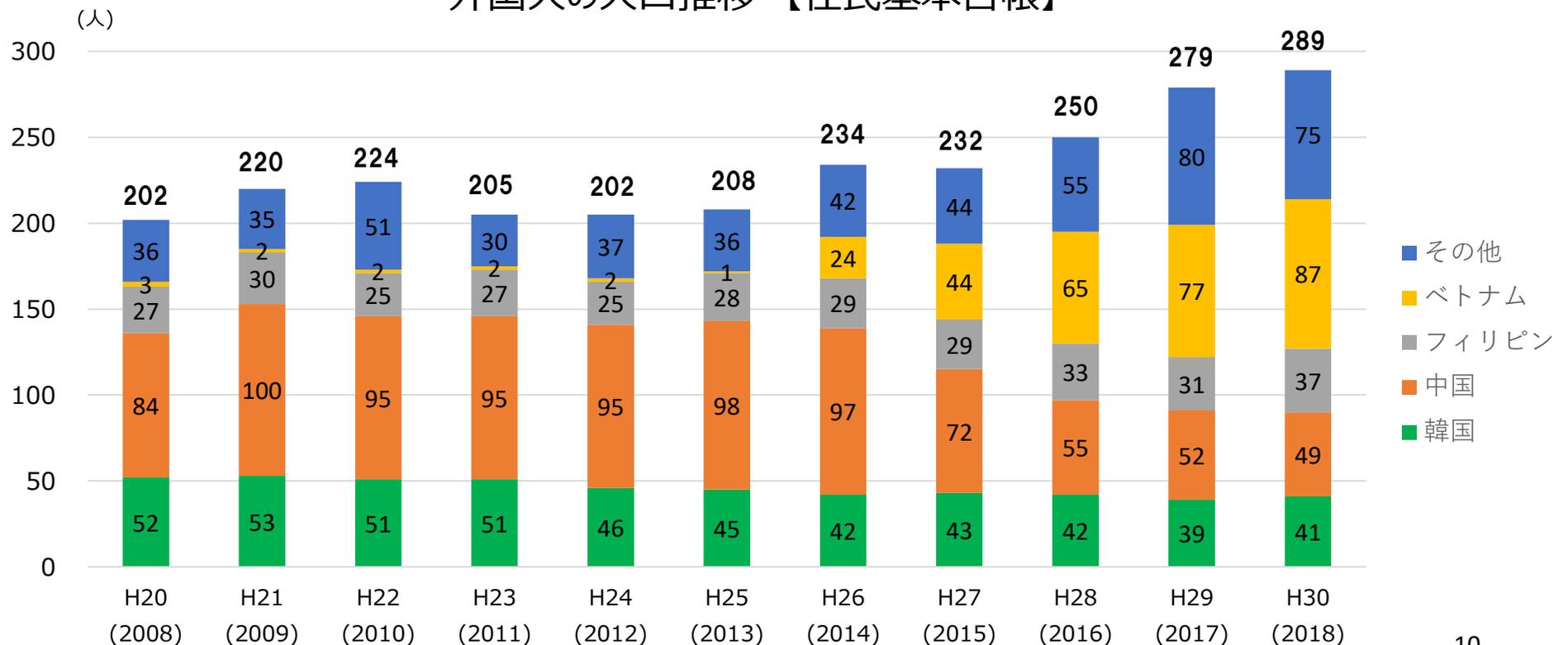
各地域への転出超過の状況【転入－転出】



外国人人口の現状

- 本市の外国人の人口は、2013年以降概ね増加傾向にあり、2018年9月30日時点で289人となっている。
- 本市の全人口に占める割合は、0.6%程度である。
- 国籍別では、2013年までは中国が最も多かったが、2014年以降、ベトナムの割合が年々高くなっており、2018年時点で最も多くの割合となっている。

外国人の人口推移【住民基本台帳】



人口動態に関するまとめ

- 近年、本市の人口は減少傾向が継続しており、現行の総合計画終期の目標人口である52,800人をH29以降下回っている。一方、高齢化率の上昇も継続しており、H30では35.2%となっている。
- 自然動態については、合計特殊出生率は近年改善傾向にあり、熊本県や全国と比較しても高い水準にあるとともに、出生数についても、近年下げ止まりが見られている。一方で、出生に関連する指標である婚姻状況については、男女ともに40歳以上の未婚率が年々大きく増加している。
- 社会動態については、H22以降、転出超過の状況が継続しており、男女とも20～29歳の移動が多く、転出超過幅も大きくなっている。20歳代においては、進学・就職に伴う転出が特に多く、結婚に伴う転出と合わせると79.5%を占めている。
- 転出先は、大牟田市をはじめ、福岡県のその他の市町村、熊本市が多くなっており、福岡市をはじめ、福岡県のその他の市町村への転出超過が特に大きくなっている。
- 外国人の人口は、H27以降増加傾向にあるが、全人口に占める割合は0.6%程度となっている。